

北部タイにおける稲作技術

—— タイ・ヤーイ族とタイ・ルー族の場合 ——

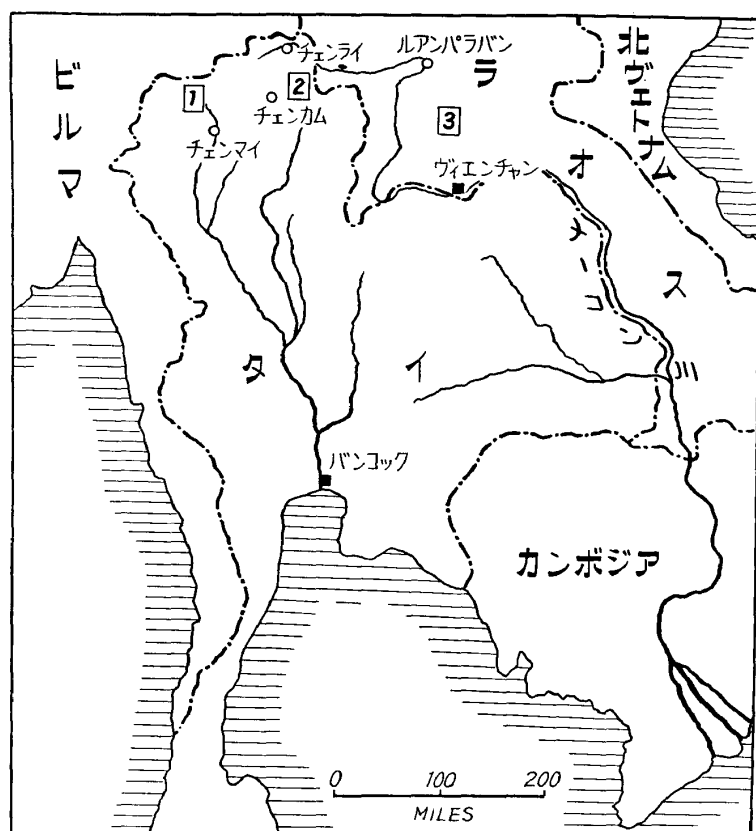
岩 田 慶 治

は じ め に

北部タイにおけるタイ族の稲作のうち主としてその技術的諸側面について報告したい。ということは、かれらの稲作にはなれがたく結びついている他の側面、とくにその宗教儀礼——いわゆる稲作儀礼——についてはここでは触れないということである。本報告の意図は東南アジアと日本とを社会的・文化的に比較検討しようとする試みの一端につらなるものであって、宗教、儀礼、社会その他の比較については別稿を予定している。ともに稲作文化圏にぞくする東南アジアと日本とがそれぞれの伝統的生活のよりどころである稲作技術において互にきわめて類似した姿をしめすであろうことはいうまでもない。しかし一体どの程度まで互に似ているのか。両者の相似と相違とをつき合わせてみることはやはり不可欠である。似ているにしろ、似ていないにしろ、当然そこからいくつかの問題がうかび上ってくる筈だからである。しかし、ここでは先ず資料ないし素材としてかれらタイ族のうち特にタイ・ヤーイ族、タイ・ルー族における稲作の実態を観察することにしよう。

さて、タイ国におけるタイ・ヤーイ Thai Yai 族というまでもなくタイ北部、ビルマとの国境附近に多数分布している。シャン高原がかれらの分布の中心地であるから、そこからの分布の周辺部がタイ領にはみ出している、現になおごくゆるやかに続いている民族移動——主として南下移動——の先端が若干タイ領に入りこんでいるということである。筆者の調査したタイ・ヤーイ族の村は北部タイの古都チェンマイ Chiang Mai から更に北上してチェンダオ Chiang Dao に至り、そこから分岐して支道に入り、小流メーコン Mae Kon の上流に位置する同名の村である。タイ・ヤーイ族の村であるが、実は若干のコン・ムアン Kon Muang すなわち北タイ地方人を交え、またごく少数であるが異種族の混入がみられた¹⁾。なお、当地ではメーコン村のタイ・ヤーイ族をニョー Nyo : 族と称している²⁾。

- (1) 少数の異種族というのはカレン Karen 族で、メーコン村の家族のうちに夫がカレンであるもの1、妻がカレンであるもの1、妻の母がカレンであるもの1であった。なお、カレンはしばしばカリヤン Kariaug と呼ばれ、メーコン村では専らヤーン Ya:n と呼ばれていた。
- (2) タイ・ヤーイをニョー Nio, Nyo と呼ぶことについては E. Seidenfaden; The Thai People, 1958 によるとかれらの住地が Ngai Lao と呼ばれる Nan-Chao 西部にあったからといわれる。その他タイ・ヤーイ一般については本書に概説されている。(p. 30~56)。また、牧野・佐藤訳：シヤン民俗誌(昭19), Dodd, W. C.; The Thai Race, 1923. がありともに有益である。



第 1 図 調査地略図

1. メーコン村 (タイ・ヤーイ族)
2. ノーン・ルー村 (タイ・ルー族)
3. パ・タン村 (タイ・ヌーア族)

北部タイ村落の人類学的調査には筆者とともに大阪市立大学理学部の松岡通夫氏、タイ国チュラロンコーン大学理学部のカンポン Kumpol Isaraura 君が同行した。松岡氏は主として栽培作物の研究にあたり、カンポン氏は陸棲貝類を中心に各種の動物採集に従った。しかし、本稿の資料もまた両氏との共同調査の一部である。またノーン・ルー村調査にさいしてはチェンカム在住で自らもルー族であるヴィラート Virat 氏の協力も忘れることが出来ない。一方、比較資料として1957～58年に行われ、筆者もその一員として参加した稲作民族文化総合調査団によるラオス農村の資料をも利用することにした。

1. タイ・ヤーイ族の稲作

1・1 最初にタネモミについて聞くことにしよう。メーコン村ではタネモミは脱穀の際から他の食糧用のモミから区別され、特別に、しずかに脱穀される。一般の場合のように地面——脱穀場の——に叩きつけて脱穀するのでなくしずかに足で踏んで脱穀する。のちこれを麻袋(100ℓ入り)につめて家の中に収納しておく。家の中というのは寝室のなかということであって米倉に収納しておくのではない。麻袋でなくカゴ (Kabung) に入れておく家もある。ラオスの

一方、タイ・ルー Thai Lu 族はタイ国内においては北部タイのチェンライ Chiang Rai 附近に若干とチェンカム Chiang Kam 周辺に相当数分布している。もちろん、北部タイのナン Nan 県にもいるし、チェンライ南西部のウィアン・パパオ Wieng Papao 附近にも若干の村落があるが、何れも人口数は多くない。筆者の調査地はチェンカム周辺の村々であり、そのうち特にノーン・ルー Nong Lu 村に滞在してやや詳細に調査することができた。

なお以上の調査は1961～62年に行われた大阪市立大学・京都大学合同第2次東南アジア調査隊による調査結果の一部であり、

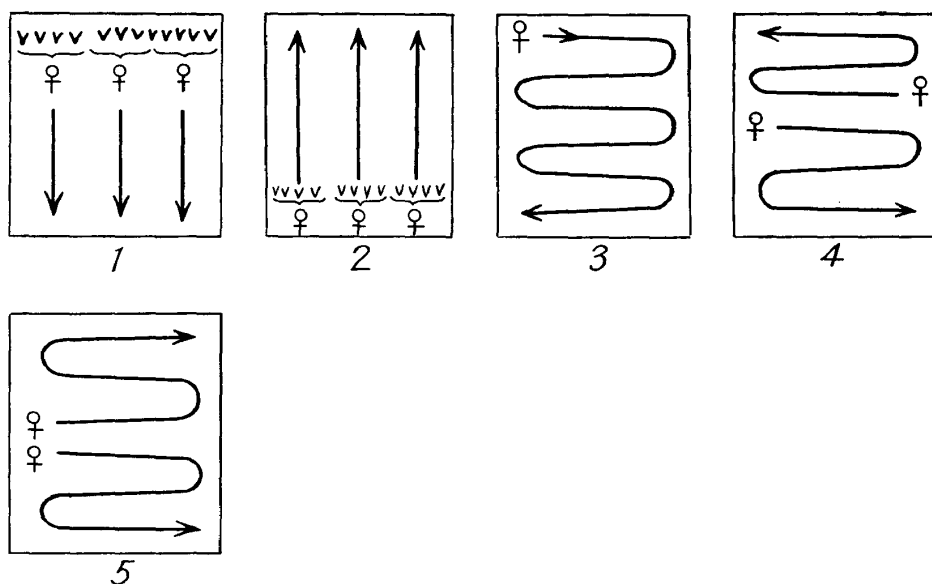
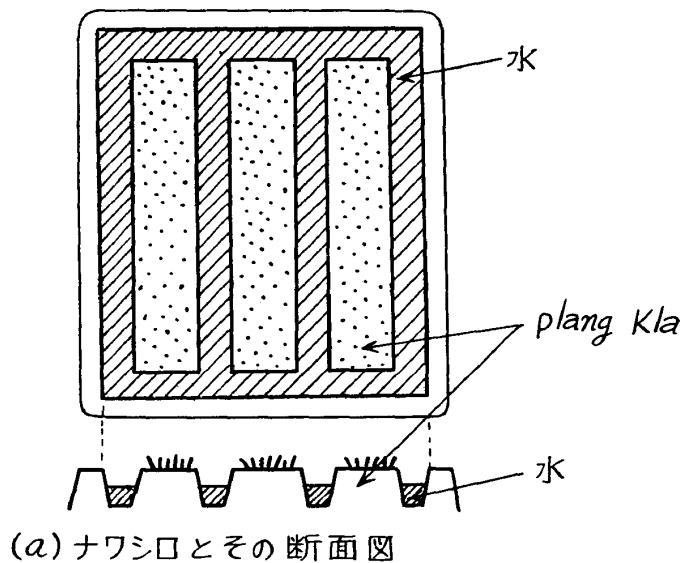
ヴィエンチャン附近では特別製の小さい米俵 Hoe khaw Prouk という、イナワラ製で長さ約45センチをつくってタネモミを収納しているがメーコン村ではこれと相違している。

播種にさきだってタネモミをカゴ (Kabung chae khaw つまりモミを入れるカゴの意) に入れ、3日3晩水につけておく。水は流水でも静水でも、あるいは田んぼの水でもよい。また、タネモミを麻袋に入れて水にひたす家もある。いずれにしろカゴや袋をとっぷり水につけてしまわずに、その上部を水から少し出しておく。その方が早く発芽する。3日3晩して水から引きあげ1日1晩日蔭におく。そうすると発芽しはじめるから、これをカゴに入れ男が肩にかけてモミマキ (Wa:n kla) する。女はモミを播かないが、それは仕事が女に不適當だからである。もちろん、この時にはすでにナワシロ (Ta: kla) の用意が出来てはいけなない。ナワシロは水田のうちの幾分小高いところを選んでつくる。洪水につかることがないためである。ナワシロを作るには先づナワシロ田に水を入れ、水中で耕起し、その後一たん水を引き、苗床をあげてのち再び水を入れるという順序による。かくして作られたナワシロの具体的な形は第2図の通りである。一般にナワシロは毎年同じ場所につくるが、その年の結果が思わしくないような場合には翌年違った場所にナワシロを仕立て直すことがある。何れにしろナワシロは各家族ごとにつくり、村の共同ナワシロはない。次に播種するモミの量についてみると、モミ5ℓにたいしてナワシロには 2rai (1wa×4wa の苗床が2つ) の面積が標準であるようである³⁾。

1・2 ナワシロのナエは播種後30日たつと田植えに適する大いさになる。田植えの作業は先ずナエトリ (Ton kla) から始まる。ナエトリには男があたり、そのナエを女が植えるというのが順序であるが、男が田植えしないわけではない。田植えはタイ語、ラオ語でダム・ナー Dam Na であるが、タイ・ヤーイ族はソムナー Som Na といい、コン・ムアンはプルーク・カーオ Plug Khaw という。ここでは田植えに特別な——わが国のハレの服のような——服装をすることはないし、女が化粧することもない。もちろん、田植えの前に田の耕起はすませている。田の土質が堅ければ水牛で耕し、軟らかければ牛で耕すのが一般的な傾向である。

さて、田植えの方法であるが、田植え女——大ていは女——が1列にならび、後退しながらそれぞれ4～5条ずつのナエを植えてゆく。1枚の田が終ればそのままアゼをこえて次の田に移ってゆくのが普通。しかしこれにはいくつかの方法がある。(1) 上記のように後退しながら植えてゆく方法。これが一般的で大ていこの方法にしたがっているが、なかにはこれを好まない農民もいる。理由は自分の足跡に植えることがあり、そうするとナエが浮上するという。(2) 稀ではあるが前進しながら植えてゆく方法もある。この方法はタイ・ヤーイ族よりもコン・ム

(3) 1ライ (rai) は公式には 20wa 平方の土地、1wa は1ヒロ (尋)；一般に 2.5rai=1acre, 6.25rai=1hectare と換算されている。しかし、慣習的には 1rai は田の1区劃をいい面積の大小に拘らない。田の1枚が1ライである。



第 2 図 ナワシロと田植えの形式 (タイ・ヤーイ族)

アンが行うことが多い。(3) 1人で田植えする場合にはS字形に1枚の田を往復しながら植えてゆくことがある。(4) もちろん2人で田植えする場合にもこのS字植えが行われるが、その場合には田植え始めの女の並び方によって更に2法がわかる。(5) メーコン村南部のムアン・ガイ Muang Ngai 地区では時にいわゆる廻り植えをすることがある。これは田の面積が大きく田植え人の人数の少ない場合に行われることが多い。ちなみにムアン・ガイ地区は広々とした河谷平野がひらけ、概して田の1筆面積が大であった⁴⁾。(第2図, b)

(4) この田植え方式の多様性はわが国の場合とよく似ていて面白い。例えば早川孝太郎：稲作の習俗。

田植えには最近のわが国におけるように道具——たとえ簡単なものにしろ——を使うということがない。すべてが勘と経験によってなされる。だからこそ田植えは女性に適した作業といわれるのである。なお、田植えの際には一応、田の水を引き、田植えを終わってから苗の半分程まで水を入れるのである。田植えの際に水を入れたままでおくと、風の強い時には苗が浮上るおそれがあるからである。

いうまでもなくタイ・ヤーイ族の稲作はモチイネ (Khaw Nio) が中心であるが、多少のウルチイネ (Khaw Chao) も栽培されている。しかし、これら2種のイネに対して田をえらび用いるということはない。同じ田をモチにもウルチにも利用しうる。しかし、モチ、ウルチにそれぞれ2種あり、苗床の期間に長短ができる。そこで用水管理上、早く発芽するものと遅く発芽するものとは苗床の場所をえらぶ必要がある。一般に前者は上流部の苗代にうえ、後者は下流部の苗代にうえる。

田植え作業は原則として村人の共同労働 (チョエイ・カン Chuej Kan といい、ほぼわが国のユイにあたる) によって行われる。もちろん、持田が少く2—3人の助力で事足りるときは2—3人の村人があつまただけであるが、村長の家の田植えには約15人の助力者があつまったという。ユイ式のものであるから田植えが終ると一寸した食物を供する程度で、夕食は各自の家でとり、酒もでない。賃金はもちろん支払われない。村中の田植えが全部終わったときにも特別の行事があるわけではなく、仕事休みの日が定められてもいない⁵⁾。もっとも田植えはチョエー・カンで行われるとあって、村には地主 (Hai Chao)、自作 (Tam Eng)、小作 (Chao Na)、農業労働者 (Lug Chang) の別があるから、すべての村人が平等に労力を交換し合っているわけではない。この、タイ族社会にふかく滲透した制度、チョエー・カンについては後にもう一度ふれることにしよう。

1・3 田植えが終ると次の仕事は水田の看視である。つまり (1) 適度な水の供給であって、水量が多すぎたら水を引き、少なければ水を入れなくてはならない。(2) 挿し方の具合、風のために浮ナエが生じたらこれを新たなナエと取かえる。(3) カニはナエを喰い切ることがあるから、カニ退治をする。(4) 雑草取り。田植えののち25日したら雑草が生えはじめるという。だからこの頃一度すっかり田の水を引き、雑草をぬいてアゼに集める。終わって水を入れるが、この後はたとえ雑草が生えても水を引いて草とりをしない。この頃の雑草は殆んどイネを害さないからである。結局、雑草とりは田植えののち収穫までに1回だけである。

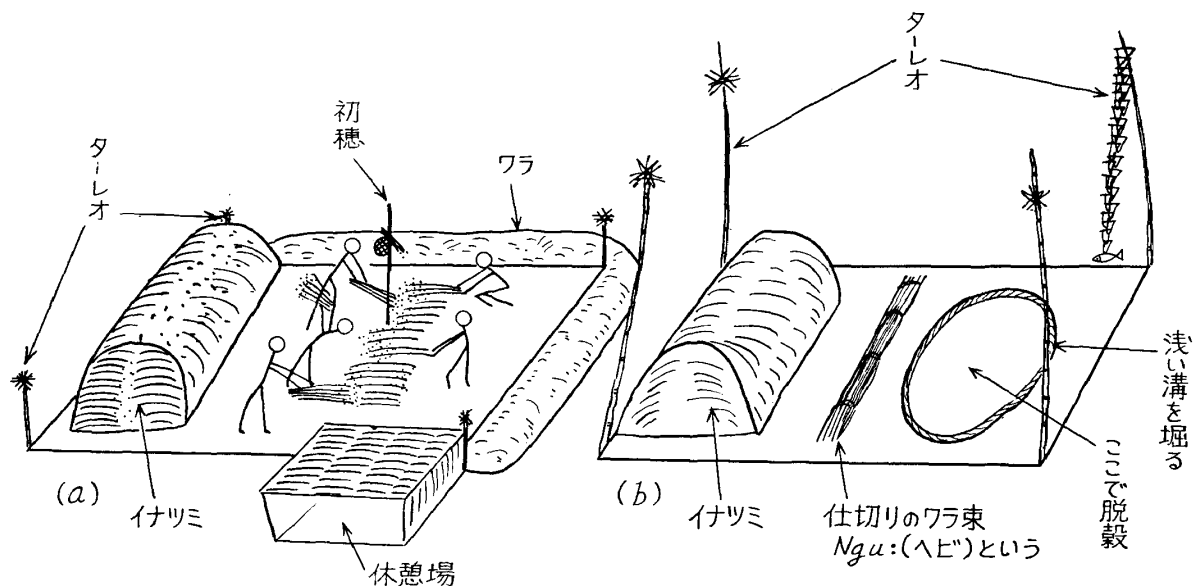
用水管理の問題は北部タイではわが国における程重要なものではない。水不足ということが殆んどないし、または下流地方のような洪水も稀である。そこで原則は用水を各人の自由な管理にまかせるということである。といっても主要な灌漑水路は十分に管理、維持されなければ

(5) これらの点についてビルマのシャン族は多少ちがった習俗をもっているようである。牧野・佐藤訳：シャン民俗誌 (p.177~182) によると共同苗代、田うえ前後の饗宴その他について記されている。

ならないので、これは村の共同管理下にあり、修理その他の労力提供はさきのチョエー・カンで行うという。ところによって——または必要に応じて——川上の住民が簡単なダム——柴や竹を組み伏せ、石・土をぬりこめてつくる——をつくり、これから各灌溝に用水を均分することも行われている。またそのための若干の施設もある。しかも、このようにしてもなお、干害で収穫の乏しい場合には小作米の比率を操作することがある。すなわち、地主2：小作1の比率（取分）を1：1にするごときである。

このようにして収穫期が近づくと木製の一種の柵をつくりこれで鳥追いする。クラブ・クラブ・クラブと柵を鳴らすという。農家によっては案山子をたてるというが筆者は未見である。なお、かつてのわが国におけるのごときイナゴ追い、イナゴ捕りは行われない。イナゴは比較的に無害であるといっていた。

1・4 さて、7月上旬に播種、同下旬に田植えをすると11月下旬か12月上旬には稲刈りということになる。イネカリは普通——そしてコン・ムアンも——キョ・カーウ Kiaw Khaw というが、メーコン村ではパート・カーウ Part Khaw と称する。その年のイネの成育状況によって日取りは異なるが、何れにしる乾季のさなかに行われることに相違はない。イネカリは男女ともにカマ (Kiyo) で刈り取る。刈り取る部位は必ずしも一定していないがメーコン村ではおよそ地面から 30~40cm のところである。穂首刈りではない。イネを刈ると、刈ったところ、すなわち田で 4~5 日間乾燥させる。株干しである。他方、田のなかの適当な場所を選定して脱穀場 (La:n Khaw) の用意をする。普通、比較的乾燥した場所の田一枚がこれにあてられるが、この場所のイネを刈りとり、田面をしっかりと平坦に踏みかためる。その4隅に呪術的な竹の標示 (ターレオ Taleo という) をたて、中央に初穂を飾り、土地神へ供物をささげる等



第 3 図 脱穀 (イネコキ) 場の 2 様式 (タイ・ヤーイ族)

の儀礼についてはここでは省略する。脱穀場に接してごく簡単な小舎がけをしくみ、休憩場とする。脱穀場の設備ができるにつれて続々とイネが運ばれてくる。脚つきの天秤で荷なわれてくるのである。イネ束は脱穀場の一角に積上げられるのだが、それに先だってワラを敷きその上にフタバガキ (Dipterocarpus) 科の葉をならべ、そこにイネ束を重ねてゆく。もちろん、穂をぬらさないためである。所定のイネ束が積上げられるといよいよ脱穀である。ただし、メーコン村における脱穀場のタイプに少くも2型あることを注意しておく。すなわち (1) 長方形の一角にイネ束を積上げ、のこりの土面を脱穀のために利用するものと (2) 一角にイネ束を積上げるのは同様であるが、さらに脱穀の場を円形に縁どり (実際はクワで浅い溝を掘る) その外側にワラ束をよこたえて仕切りをめぐらしたものである。(第3図)

脱穀 (イネコキ) にはイネ束を縄 (あるいは皮ヒモ) で結んだ2本の棒 (マイ・ニープ Mai Neep) で挟みこみ、頭上に振りあげ、地面に叩きつけるという方法である。タイ国のイネは脱粒性がつよいから、二・三度地面に叩きつけるだけで大部分のモミが脱落する。が、もう一度、一応、脱穀のすんだワラを集めて2本の叩き棒 (コン・サイ・キー Kon Sai Ki) で打叩いて完全に脱穀し、イナワラを脱穀場のまわりに積み上げる。

さて、脱穀場の中央にモミ山がたかだかと積まれてゆくと今度は風選の作業にうつる。一人の男がモミ山にのぼり、カゴにモミをすくい頭上に持上げてからモミを注ぐ。そのとき4〜5人の男が手に手にウチワ (カー Ka:) をもって扇ぎ、ワラボコリを吹きとばす。脱穀作業もこの頃になると大体の見透しもつくし、多少疲労してもくるので、喚声をあげ或いは奇声を発しながら賑やかに行われる。あるものは休憩所へいって一杯の濁酒をのみ、あるものはキンマを噛む。村の女が軽い食物をはこびこむのはこの頃より少しはやい。脱穀が終ってもなお午後の日がたかく輝いていればそのままモミの運搬にかかる。家から牛車をひき出してきて、所定のバスケット (Tung) でモミをつみ込む⁶⁾。このバスケットの容量は20℔と一定である。従ってモミの収量は専らバスケットの数で計量する。なお、牛車にバスケット何杯のモミを運び込んだかということ間違いなく計算するためには簡単な器具、つまり竹の数取り器 (Mai Nap San Khaw) が使われている。田の所有者が傍に立会って牛車にバスケットのモミが運ばれるたびに一節一節と竹片を折ってゆくのである。かくしてモミはそれぞれの農家の米倉に運びこまれる。

ところが若しその日のうちにモミを米倉に運び切れない場合にはどうするか。そのとき、すなわちモミ山が脱穀場に一夜放置されるときには、手近のイネワラを焼き、黒いワラ灰をモミ山の周囲にふりかけておく。これが盗人除けの呪法である。また実際にワラ灰の乱れから盗人の有無を知りうるわけである。ただし、この場合には単に呪法に頼るだけでなく、銃を持った2

(6) 実際にはこのバスケットの大きさに2種ある。大きい方を Tung, Tang といい 20℔ 以上入る。小さい方を Kwai という。しかし公式に 1Tang といえば 20℔ のことである。

人の村人が脱穀場の一隅にたてた小舎に泊りこみモミの番をすることが多い。もっとも銃を持っているのは、必ずしも盗人に対してではなく、夜間に襲来する野獣を射つためであろう。

いずれにしる脱穀の手伝いに来た村人たちは三々五々、賑やかに冗談をいい合いながら家路につく。酒の勢いもあり、みのりの喜びもあろう。夕暮れの川辺にあかあかと焚火を燃やし、水浴し、そのまま全裸で踊りまわることもある。もちろん、手伝いの女たちは別に帰るのだが、下流の途から男たちの乱舞を見守っているときもある。そしてやがて、男も女も陽気に歌いながら家路を急ぐ。ヘーイ・ヘーイという叫びが谷間にこだましている。

1・5 イネ刈り、脱穀も村人の共同作業で行われる。例えばメーコン村の村長カムサイ Kamsai の脱穀作業——かれは12ライの水田をもち、牛、水牛各2頭をもつ——には男19人、女5人が手伝いにきた。また、村人チャン Chan Pinnya の脱穀場では男10人、女10人が手伝っていた。チョエー・カンを必要とする重要な作業の1つがイネ刈りであり、脱穀なのである。なお、この人数での作業時間についてみると、村長家の場合、午前9時に脱穀を開始し、午後5時30分に終了、もっとも米倉へのモミ運び込みは翌日になった。これを収量についてみると12ライの田から合計300バスケットのモミを収納したのであり、1バスケットを約20ℓ、1ライを $\frac{2}{5}$ エーカーとして計算すると反当約3～3.5石（ただしモミのまま計算）ということになる。なお、1960年度におけるメーコン村公式報告によると同年の全収穫量は2,300バスケット、1962年度（調査時）のそれは3,300バスケットであった。

1・6 脱穀場として利用したところは周囲に竹垣をめぐらし、そのなかに小舎がけしてニワトリを飼うことがある。落穂を利用してニワトリを育てるのであろう。ニワトリがよく育つといていた。なお、村人自身は決して落穂ヒロイをしない。落穂を拾うと不幸になるといい伝えられている。水田の刈跡は牛、水牛の放牧場として利用され、脱穀場のワラも最後には農家に運びこまれて乾季における家畜の飼料に供される。

2. タイ・ルー族の稲作

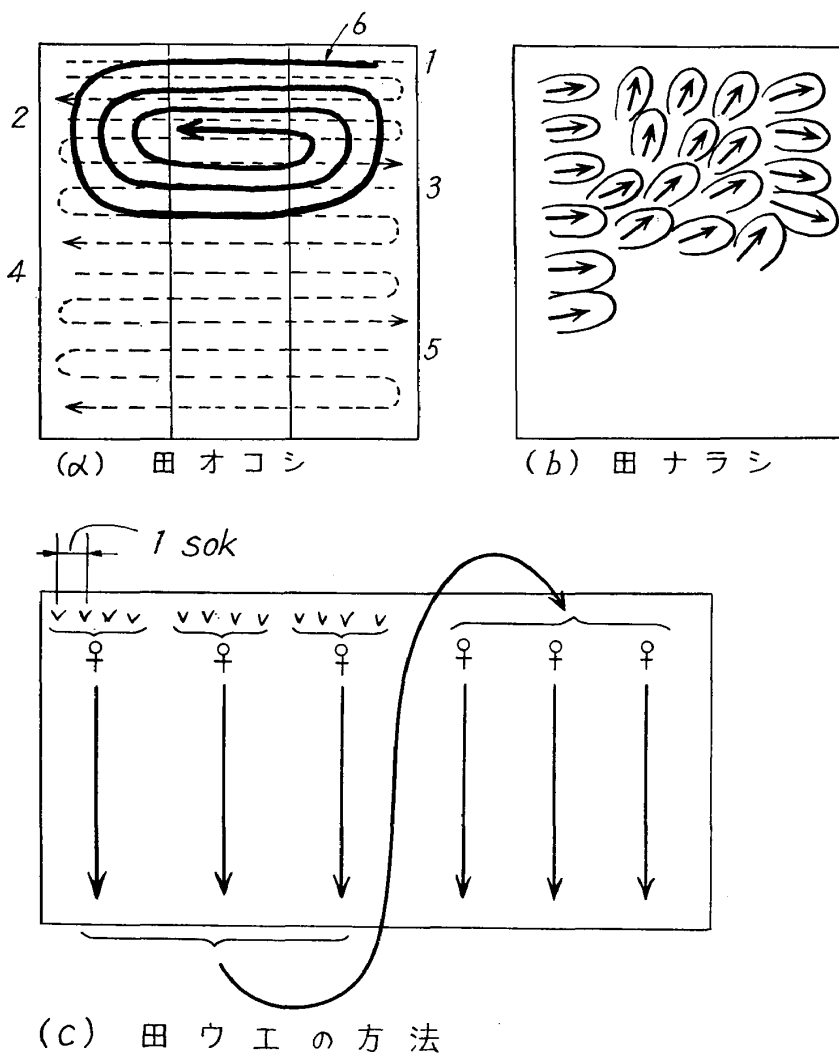
2・1 タネモミは脱穀のさいイナヤマのなかからよい穂をえらんで足でていねいに脱穀し、布袋に入れて家内に貯えておく。

6月初旬にナワシロの準備をする。これには先づ土地をえらぶが、タイ・ルー族はナワシロに田を用いることをしない。村ちかく、あるいは田に近いゆるい傾斜地をえらぶ。宅地は用いない。田より少し小高くなったところがよい。先づパグー (Pa Ngou) と称するクワで草を刈り取り、次いでルン (Lung) という先端に金属部のついた一種の堀り棒で3～5cm 間隔に穴をあける。穴のなかに数粒ずつモミを入れて土をかぶせる。タネモミは前処理せず、そのまま用いる。その後、雨を待つだけでナワシロに水を入れることはない。陸ナワシロであり、アゼを作ることもない。また、雑草とりもしないが、古い草の根があれば引抜いておく。ナワシロは

男女いずれも作ることが出来るし、タネモミをまくのも男女いずれでもよい。家族ごとに、家族内で助け合って行く。タイ・ルー族はナワシロを水田のなかに作るとナエが大きく育たないという。陸ナワシロの方が土地に肥料分が多いためナエが丈夫に育つ。ただし、少数の人が水田の一部にナワシロを作っている。その場合には肥料として水牛の糞を入れる。陸ナワシロの場合、肥料は必要ないが原則として毎年その場所をかえる。2年ぐらいなら同じ場所にナワシロを作ってもよいが3年つづけることはない。しかし、一度放棄して3年たてば再びもとの場所にナワシロを作り得る。肥力が回復すればよいのである。ナワシロの周囲には垣をめぐる事が多い。なお、ナワシロの面積と数は持田の面積による。普通、2ライの田にたいして1ンガーン Ngarn のナワシロ、これに2バスケットのタネモミが標準とされている。

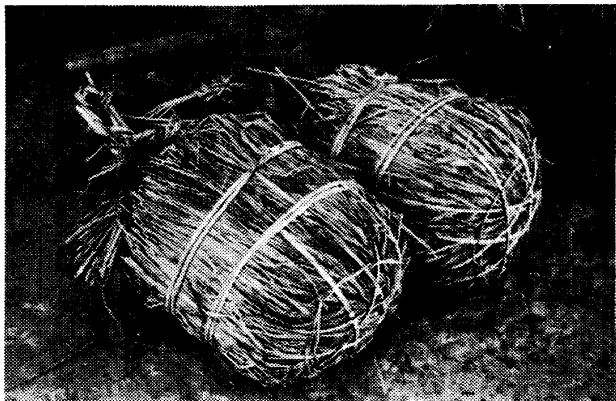
2・2 ナワシロのナエは

1~1.5ヶ月で成長し田植えの時期をむかえる。そこでそれまでに本田の準備が必要。先ず最初にスキ (Tae) で田オコシをする。スキは水牛の1頭びき、男1人がつく。スキで古株を引っくり返し、日にさらして3日、もう1度引っくり返す。こうすると雑草がすべて死ぬ。田オコシがすむとその日の午後アゼ修理をして水を入れる。川水である。それからパー (Per) でもう1度土を引っくり返し、田を平らにする。パーが草を引きずったらそれを取除く。なお、田オコシの方法は第4図(a)のごとくであり、第1回目にはアゼを越して往復し、第2回目に渦巻形に耕す。

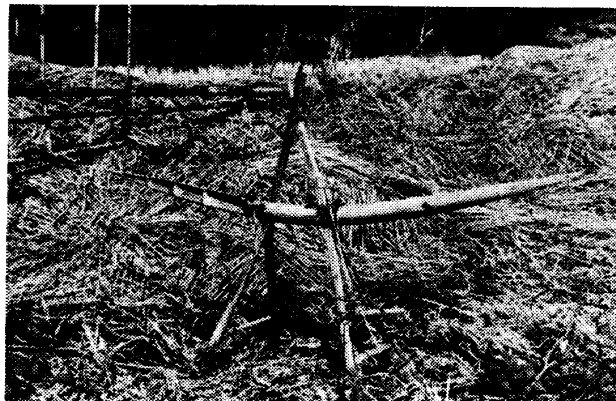


第4図 田オコシと田植え (タイ・ルー族)

(7) 面積の単位について 20wa 平方を 1rai ということはタイ・ルーも同じ、1/4rai を 1ngarn という。なお、田1枚を面積にかゝわず 1hai (ハイ) という。hai→rai である。



1. タネモミの俵（ヴィエンチャン附近）



2. 刈稲をはこぶ脚付天秤（タイ・ヤーイ族）



3. 刈稲をはこぶ（チェンマイ附近）



4. 共同の脱穀作業（タイ・ヤーイ族）



5. 大籠による脱穀（チェンマイ附近）

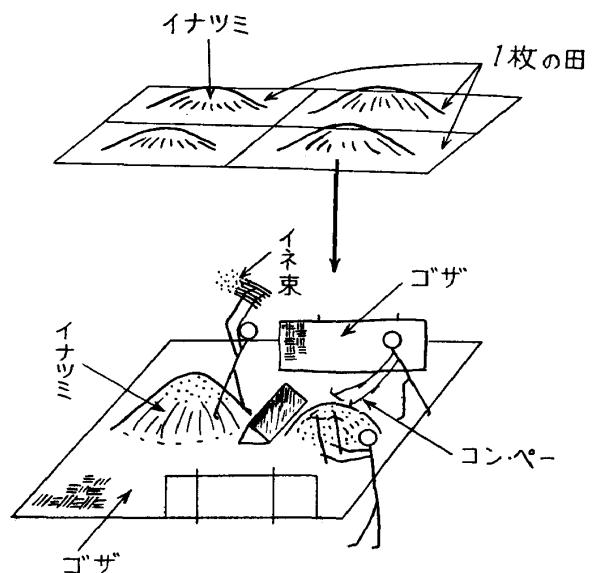


6. 竹の架台による脱穀（チェンマイ附近）

かくしていよいよ田植えである。田植えつまりダム・ナー (Dam Na:) はここではプーク・カーオ (Pouk khaw) という。その頃、ナワシロのナエは高さ 30cm (1sok すなわち20mae) ぐらいに伸びているが、伸びすぎていれば移植のさい葉さきを切り、35cm ぐらいに揃える。これをしないと移植した後でナエが倒れるという。さて田植えは男もしないわけではないが主として女の仕事である。ナエを束ね、田のなかの所々に分配して置いてから田植えにかかる。ナワシロからナエを抜き適当な草丈に揃えるのは男の仕事である。ここでも田植えの際は女たちが1列に並びそれぞれ4条ずつのナエを植えてゆくのが標準。ナエの間隔は約 1sok, したがって女1人が 1wa の巾を受持つことになる⁸⁾。若し1枚の田が矩形をなしているとする、田植えは第4図(C)のように短辺にそって後退しながら植えられてゆき、アゼに達すると、もう一度初めの位置にもどって後退植えをくり返す。S字形に往復しながら植えることはない。ノーン・ルー村では殆んどがこの方法によっているらしく、他の方法については報告がない。田植え女は日常の服装のまま田に入る。また、共同作業ではなく専ら家族内で労力をまかない、どうしても不足ならば日当を支払って人を雇う。

田植えが終了しても新たに水を入れることはないし、雑草取りもしない。ナエがカニに喰われたら植え直す程度である。カカシもたてないし、鳥追いもしない。害鳥もいないのだから。用水管理も従来とかくの問題になったことはなく、田植えの後はずべてが自然にまかされている。

2・3 このようにして12月になるとイネカリである。(1) イネカリは男女ともにする。カマで根元から 50cm ぐらいのところを刈るが、イネの草丈が低ければもっと長く(根元にちかく)刈るようにする。刈ったイネはその場所におき4日間乾燥させる。(2) タイ・ルーは特別な脱穀場をつくらず、1枚の田ごとに——田の面積が小さければ、2—3枚の田ごと一括して——乾燥したイネを束ねあつめ、両脇にかかえてゴザの上におく。このゴザ——大ていは2枚並べて敷く——が脱穀の場所となる。イナ山をつくり、その前面ゴザの上に脱穀板 (Tii khaw) を置き、両側に各1枚のゴザをツイタテ状にたてかける。これで脱穀準備が完了する。(3) 男1人でイネ束をティー・カーオに叩きつけて脱穀してゆく。ティー・カーオの前面にはモミ山ができてゆくが、なお、



第5図 脱穀法 (タイ・ルー族)

(8) 1sok はヒジから中指の先端まで、1sok=20mae で 1mae は拇指の巾をいう。

イナワラも交っている。そこで男2人がそれぞれ2本棒（コン・ペー Kon Pae）をもって打ち叩き完全に脱穀する。最後にウチワ（ウィー Wi:）で風選。（4）モミはすぐさま米倉にはこばれ、男たちは次の田へ行って同様に脱穀作業をくりかえす。つまり、タイ・ヤーイ族のように持田のイネを1ヶ所に集め村人の共同作業によって脱穀するのでなく、1枚の田ごとに家族単位で脱穀してゆくのであって、きわめて特異な方法といわなければならないだろう。ここではイネ刈り、脱穀ともチョエー・カン行われていない。

収量についてみるとノーン・ルー村では反当4～5石（モミのまま）が標準、したがってメーコン村よりもかなり生産高が上廻っている。これが何に由来しているのか、ともに肥料は使わないのであるから、土質によるものか、水質・水温のちがいか、目下のところ不明である⁹⁾。

3. いくつかの問題点

3・1 北部タイにおける稲作の提供する問題に関して詳細な検討は他日を期することとし、ここではごく簡単に2, 3の問題点を指摘しておきたい。

最初に気づくことはタイ・ヤーイ、タイ・ルー両族の稲作がタイ国内の他地方およびラオス、ひいては東南アジア一般における稲作と大局的にきわめて類似したものであることである。そして、この点ではわが国の稲作も例外ではない。稲作栽培過程、すなわち播種から収納にいたる過程は地域的な差異をこえて共通する部分がきわめて大である。

しかし、だからといって細部における顕著な相違を見逃すわけにはゆかない。今後の問題はこれらの相違を稲作技術における発展段階の相違に帰せしめるか、地域的・種族的条件の差に還元するか、いずれにしろ何等かの方法によって相違の意味づけをしてゆくことである。例えば（1）タイ・ヤーイ、タイ・ルー族とも田植えを行っているが、一体、東南アジアにおいて田植えを行っていないところ、つまり直播による地域は浮稲地帯以外にどのくらい分布しているであろうか。直播と移植（田植え）との関係が東南アジアの水田地帯について未だよくわかっていない。（2）わが国では田おこし（水田耕起）を人力で行い、シロカキを牛・馬耕で行うのが最近までの一般的傾向であったが、北部タイでは最初から＜人・水牛あるいは牛・スキ＞が1組になって労働している。労力として家畜が大巾に取入れられている。（3）東南アジアでは殆んど肥料を使用しない。金肥はもちろん、草肥その他の使用もごく少い。取入れ後に放牧した家畜の糞が多少とも肥料として役立つのみである。この点ではタイ・ヤーイ族もタイ・ルー族も変りがなく、ラオスのタイ・ヌーア族も同様であった¹⁰⁾。（4）播種にさいしてタネモミを前処理するところとしないところとがある。（5）田の草とりはわが国におけるよりずっと簡

（9） ノーン・ルー村におけるモミ収量の標準は $1\text{ri}=35\sim40\text{harb}=70\sim80\text{tang}$; $1\text{harb}=2\text{tang}$; $1\text{tang}=20\ell$ である。

（10） もちろんビルマのシャン族のような例外もある。

略であり、したがってそのための道具も発達していない。(6) 田植えの方法には様々のタイプがあるが、その殆んどがわが国におけるそれと類似している。このような方法は地域的差異をこえて多様に発明・開発されてゆくのであろうか。今後、調査がすすむにつれて従来わが国で見出されたすべての田植え方法がいずれも東南アジア各地に指摘されることになるであろう。(7) カリイネ（刈稲）の乾燥は地干しが普及しており、わが国のごとき稲架、ハサの使用は見られない。少くとも筆者は見たことがない。(8) 脱穀過程はイネ品種の相違を明瞭に反映して著しい相違があるがこの点については後述する。(9) 調整過程になるが東南アジアではわが国に比しワラの利用がはるかに少い。かつて筆者はラオスのヴィエンチャン附近の農村でタネモミを入れてある米俵をみたが、その後はついにワラ工品を見たことがない。東南アジアではわが国のいはば＜ワラの文化＞にかわって＜竹の文化＞がきわめて優勢である。(10) 病虫害にたいしては、ここではなお専ら呪術的に対処しようとする傾向がある。

3・2 今後の研究課題として筆者が考えている事項を2～3あげておくことにする。(1) タイ・ルー族にみられた陸ナワシロの慣行は東南アジア地域においても極めて特異なものと思われる。一体、これを稲作発達史のなかに如何に位置づけたらよいのであろう。中国の稲作においても——水苗代が一般的であるが——広東地方の一部では晩稲が陸苗代で仕立てられているといわれるが、タイ・ルー族のそれもこの事例と関係があるであろうか¹¹⁾。(2) 脱穀法（イネコキ）については地域的・種族的にきわめて変異にとんでいる。タイ・ヤーイ族は脱穀場の地面に穂を叩きつけるのだが、タイ・ルー族は支架のついたタタキ板を使う。チェンマイ周辺からチェンライ、チェンセンへかけて北部タイでは広く脱穀用の大カゴが用いられ、ラオスのヴィエンチャン周辺では水牛に踏ませる方式が普及している。また、かつて筆者の滞在していた北部ラオスのパ・タン村ではタタキ台に打ちつけるだけであった。もちろん、ある地域、ある種族は必ず1種類の方式のみによっているかというところでもない。筆者の旅行中の観察からすれば脱穀様式は、牛車の形態、農民(女)のスゲガサなどと並んで地域差、地域性を示す目立った——目につきやすい——尺度となるように思われた。地方文化の未成熟な東南アジアにおいて強いて地方性を求めようとすればの話ではあるが。いずれにしろ脱穀様式とその変化の方向にはなお注目すべき問題がひそんでいるかも知れない。(3) 田植えと脱穀における労働組織についてタイ・ヤーイ族はチョエー・カンにより、タイ・ルー族は専ら個別的な家族労働に依存していると述べた。しかし、この問題はきわめて重要であるから更に綿密な調査が必要である。例えば、北部ラオスのパ・タン村(タイ・ヌーア族)ではイネ刈り、脱穀はやはり一種の共同労働によって行われているが、そこではいわゆる共同労働に次の3種がみとめられる。(a) タン・バーン・ソエイ(Tan Ba:n Suey)、これはわが国のいわゆる村仕事であって水路・道路の修理その他村全体のための労力提供である。(b) スア・ディオ・ソエイ・カン(Sua Diaw Suej Kan)

(11) 天野元之助：中国農業史研究（昭37）p. 398



7. 水牛に踏ませて脱穀（ヴィエンチャン附近）



8. 残ったモミを叩く（タイ・ヤーイ族）



9. 風選（タイ・ヤーイ族）



10. モミ山に藁灰をふりかける呪術
（タイ・ヤーイ族）



11. モミの運搬（チェンマイ附近）



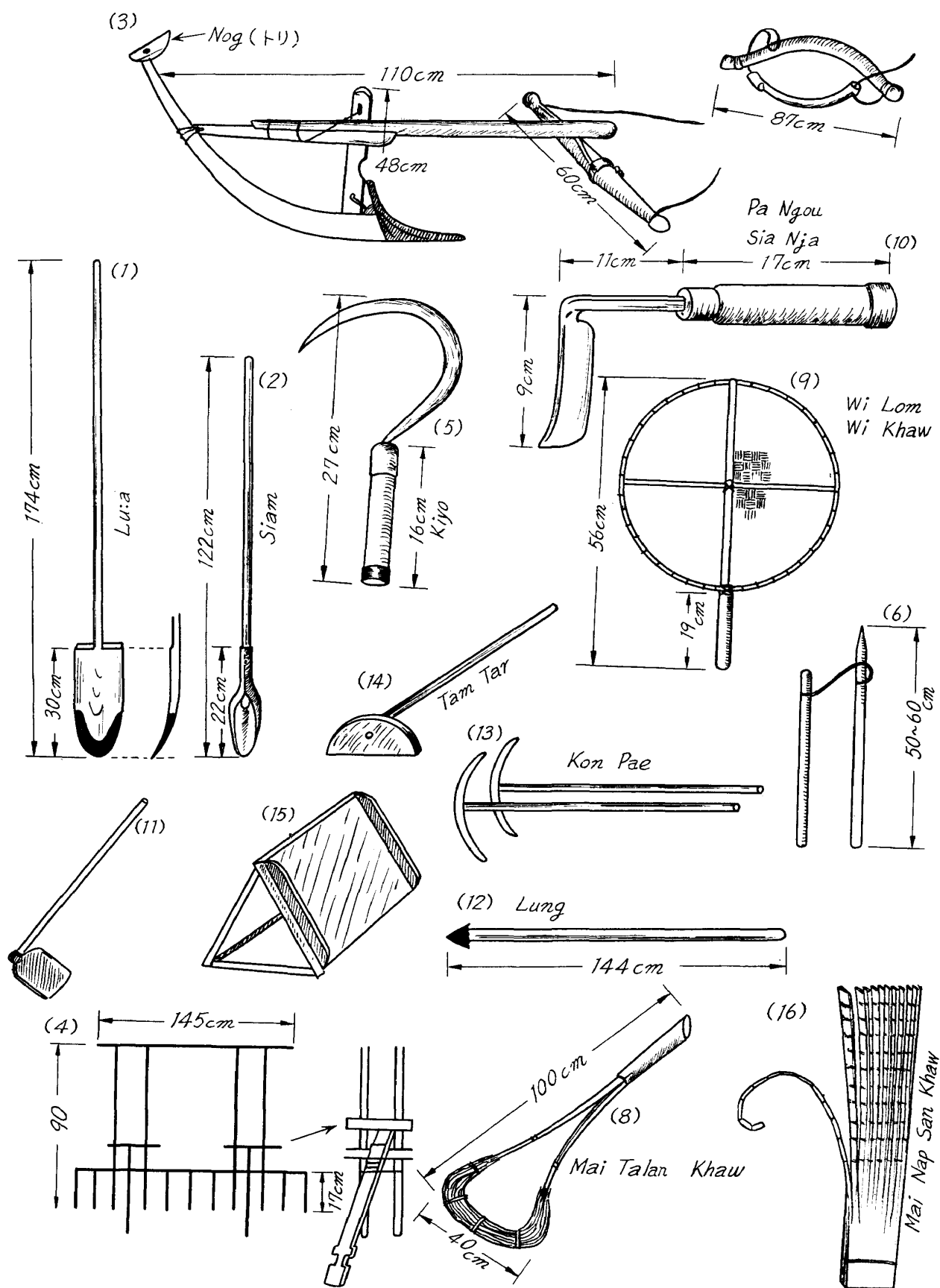
2. 刈跡のつるべ式放牧
（チェンマイ附近）

これはスア・ディオ・カンと称する一種の父系的親族集団の相互扶助であり、労働様式としてはユイ的なところがある。(C) チュム・ディオ・ソエイ・カン (Chum Diaw Suej Kan) これはチュム・ディオ・カンすなわち村内における一種の双系的親族内における相互扶助である。実際には夫妻の夫方、妻方のごく近い親族が都合のつく限り手助けするということである。ところでパ・タン村における田植え、稲刈り、脱穀時における労働力の組成、あるいはいわゆる作業団の構成についてみると大きい流れ、ないし傾向として、スア・ディオ・ソエイ・カン→チュム・ディオ・ソエイ・カン→家族労働（主として夫妻の労力による）への推移が看取される。そこでもしこの傾向が一般にタイ族社会における部族レベルから国家レベルへの推移、山地から平野への民族移動と生活の展開とに対応するものとすれば、この点を1つの尺度としてタイ・ヤーイ族、タイ・ルー族の位置づけを考えることが出来るかもしれない。しかし、実際は社会・文化のすべての側面が歩調をそろえて変化してゆくわけではないので、簡単にタイ・ヌーア→タイ・ヤーイ→タイ・ルー→タイ・ラオないしコン・ムアンといった発展系列を予想するわけにはゆかないであろう。ただし、より錯雑してはいても、タイ諸族における一連の発展・変化を考えうるということは注意しておきたい。(4) 農具の問題もきわめて興味深いものである。一体、いかなる農具が稲作用具として開発され、普及していったものか。いかなる農具

第 1 表 稲 作 労 働 と 農 具

〔()内の数字は第6図の番号〕

種族名 (調査村名) 作業の種類	タイ・ヤーイ族 (メーコン村)	タイ・ルー族 (ノーン・ルー村)	タイ・ヌーア族 (パ・タン村)
苗代仕立て	Siam Choo	Pangu ¹⁰⁾ , Kabog ¹¹⁾	Lua ¹²⁾ Siam ²⁹⁾
播種		Saem Lung ¹²⁾	
田おこし	スキ	Tai (スキ)	Tae (スキ) ³⁰⁾
田ならし		Par	Ra:t Na ⁴⁰⁾
田植え	なし	なし	なし
除草	なし	なし	なし
稲刈り	カマ	Kiyo (カマ)	Kiyo (カマ) ⁶¹⁾
稲こき	Mai Nep Khaw Tap Ta: Kangke Yu: Kon Sai Si	Mai Daen Tam Ta: ¹⁴⁰⁾	Riam Fa:t Khaw ⁶²⁾ Ka Sop ⁷²⁾ Mai Talan Khaw ⁸²⁾
風選	Ka:	Kon Pae ¹³⁰⁾ Wi (Wi Khaw)	Wi: lom ⁸⁹⁾
もみすり	唐臼	唐臼	Kok Tam Khaw {Kok (立臼) {Shark (立杵)
運搬具	牛車	牛車	Kwai Ke:



第 6 図 さ ま ん ま の 農 具

が稲作以外の畑作、焼畑作その他からとり入れられたものか。農具の型の分布、農具製作者の問題、他の生活用具との関聯など考えるべき点は甚だ多い。一般にタイ族はきわめて古い時代からスキ耕による稲作民族であったといわれている。そして実際かれらの間にみられる稲作用具とその名称には幅広い類似性がみられる。しかし、それにもかかわらず若干の差異がみとめられることも事実である。筆者としてはこの差異の由来するところ、稲作用具にみられる変化の方向をたしかめたいと思っている。

要するにタイ諸族における稲作技術の問題には今日なお未解決の問題がすくぶる多い。しかし、地域的・歴史的に——社会発展史的に——多様性にとむタイ諸族の比較研究をすすめることによって残された稲作の諸問題を解決することは決して困難ではないであろう。筆者の報告もそのための1つの試みにすぎない¹²⁾。

- 追記** (1) 水稻2期作については触れなかったが、メーコン村、ノーン・ルー村ともに2期作はしない。ただし、小規模ながら裏作にピーナッツ、ガーリック、大豆などをつくる。タバコを栽培するところもある。この点はバ・タン村もほぼ同様、ただしチェンマイ附近ではところによって2期作をする。Kingshill, K.; Ku Daeng-The Red Tomb, 1960 参照。しかし、北部タイでは一般に考えられているよりも2期作地帯ははるかに少い。
- (2) 米の品種については他の報告に俟つが、北部タイ、東北タイ北部、ラオスではモチゴメが主作物でウルチゴメはごく少い。ただし、苗族、傣族など山地民族はウルチゴメを多くつくる。赤米は山間部のところどころにみられるが、殊に陸稲に多い。モチもウルチもある。傣族は黒米をもつくっている。ただし、赤米を特殊な用途に用いているわけではない。北部ラオスでは味覚の上でこれを好むものが少くない。

(12) Phya Anuman Rajadhon; Life and Ritual in Old Siam, 1961 所収の The Life of the Farmer など本稿と比較すると面白いが、ここでは省略する。